



日中韓近代初期文学の関連様相研究－明治小説の伝播と受容を中心に－

竇，新光

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2019-03-25

(Date of Publication)

2021-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7356号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007356>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目

日中韓近代初期文学の関連様相研究
—明治小説の伝播と受容を中心に—

氏 名： 竇 新光

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 朴 鍾祐 教授
(副) 濱田 麻矢 教授
(副) 緒形 康 教授

本論文は、日中韓三国の近代初期文学の関連様相を探るため、1895 年から 1919 年までの中国と韓国における日本明治期小説の伝播と受容について、東アジアの視座から、比較文学研究の方法により、総合的に考察するものである。まず日中韓作品の書誌情報を全面的に調査し、明治小説の全般的な伝播状況を概観する巨視的考察を行ったうえで、代表的な四作品『不如帰』『鉄世界』『佳人之奇遇』『金色夜叉』のそれぞれの受容の様相を重点的に検討する微視的考察を行った。

第一部では、1895 年から 1919 年にかけて中国・韓国に受容された明治小説の日本語版、中国語版、韓国語版の書誌情報に関する調査と収集を行い、初めての三国間における東アジア近代翻訳文学目録である「明治小説の中国語韓国語の翻訳・翻案作品目録（1895—1919）」を作成し（巻末附録参照）、それに基づいて明治小説の全般的な伝播状況を検討した。その統計によると、1895 年から 1919 年までの間に中国・韓国に伝播された明治小説作品は総 405 点であった。そのうち、347 点の明治小説が中国に受容された結果 370 点の中国語翻訳が出版され、120 点の明治小説が韓国に受容された結果 136 点の韓国語翻訳・翻案が出版された。また、中国・韓国に受容された総 405 点の明治小説のうち、原作が日本作品であるのは約 3 割、西洋原作で日本語に翻訳・翻案された作品は約 7 割を占めていることが明らかになった。中国・韓国に受容された明治小説のジャンルは多い順に、歴史・伝記小説、探偵・裁判小説、科学・冒険小説、政治・外交小説、家庭・言情小説、戦争・軍事小説である。中国・韓国に受容された主要な明治小説の作者は、黒岩涙香、徳富蘆花、押川春浪、菊池幽芳、巖谷小波、渋江保、森田思軒、百島冷泉である。明治小説を翻訳した主要な中国の訳者は、陳景韓、包天笑、吳梅、商務印書館編訳所、梁啓超である。明治小説を翻訳・翻案した主要な韓国の訳者は、崔南善、趙重桓、朴容喜、李相協、李海朝、玄公廉、閔濬鎬が挙げられる。また、この時期の東アジア三国間における明治小説伝播の経路は、「中国語←日本語→韓国語」、「日本語→中国語→韓国語」、「日本語→中国語」、「日本語→韓国語」の四つに分類できることがわかった。加えて、この時期の明治小説受容作品数の変遷について、中国では 1898 年～1901 年の萌芽期、1902 年～1909 年の隆盛期、1910 年～1919 年の低迷期と推移し、韓国では 1895 年～1904 年の萌芽期、1905 年～1915 年の隆盛期、1916 年～1919 年の低迷期と推移したことも明らかにした。

第二部では、「中国語←日本語→韓国語」の例として『不如帰』を取り上げ、中韓两国における受容の様相について考察した。『不如帰』は、徳富蘆花の代表作であり、日清戦争前後の日本社会を背景に、伝統的家族制度に翻弄された夫婦、武男と浪子の悲劇を描いた家庭小説・戦争小説である。1898 年～1899 年に『国民新聞』に連載され、1900 年に民友社より出版されると、明治末までに 118 刷りを記録した明治期最大のベストセラーである。『不如帰』は、20 世紀初頭の中韓两国でも大きく注目され、多様な翻訳と翻案が現れた（中国語翻訳：林紓・魏易『不如帰』1908 年、韓国語翻訳：趙重桓『不如帰』1912 年、韓国語翻案：鮮于日『杜鵑聲』1912 年、韓国語翻案：金宇鎮『榴花雨』1912 年）。近代初期の日中韓三国の読者が、武男と浪子の近代的で清純な夫婦愛に新鮮さと魅力を感じたのに加え、封建的な家族制度のしがらみに引き裂かれた二人の愛情の悲劇に深く理解・共鳴したため、『不如帰』が越境して東

(注) 4, 000 字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

アジア全域で広く受容されたと推察される。一方、受容の際に発生した変容の様相も看過できない。日中韓のテキストの比較を通して、作中の日清戦争観と儒教倫理観の扱われ方に相違が存在することがわかった。特に前者の場合、中国のテキストでは「国恥」とされる日清戦争を巡って真剣な反省が付け加えられているが、韓国のテキストでは「痛史」とされる日清戦争への直視を回避するような描写がなされている。つまり、中国の訳者・読者は作中の日清戦争の叙述と戦争小説的な側面をも重要視したが、韓国の訳者・読者は作中における男女の愛情の叙述と家庭小説的な側面にのみ注目した点で受容が異なると指摘した。

第三部では、「日本語→中国語→韓国語」の例として『鉄世界』を取り上げ、日中韓の重訳に見られる受容の変遷様相について考察した。『鉄世界』は1887年、森田思軒がフランス作家ベルヌの原典を英語訳本から日本語に重訳した小説で、仏独戦争後にフランス人の医学士が建設した理想都市「長寿村」とドイツ人の化学士が建設した鋼鉄都市「鍊鉄村」の対立と衝突が描かれている。日本語に翻訳される際に、大幅な改変が加えられた。森田思軒はその翻訳を通して、従来の小説の陳腐さへの批判とベルヌ小説の斬新さへの称賛を展開した。このことから、『鉄世界』は日本において主に「新しい小説」、「新小説」として受容されたのである。1903年、包天笑は『鉄世界』を日本語訳本から中国語に重訳した。包天笑は、科学文明の啓蒙と輸入という明確な目的を持ち、「科学小説」という角書（副題）を新設し、科学用語の翻訳と科学知識の伝達を重要視した。このことから、『鉄世界』は中国において主に「科学小説」として受容されたと捉えられる。一方、1908年に李海朝は『鉄世界』を中国語訳本から韓国語に重訳した。韓国語訳『鉄世界』は、「科学小説」と標榜したものの、実のところ作中の科学知識の翻訳は積極的に行われていない。『鉄世界』は、亡国の危機感が募る日韓併合前夜の韓国において、作中の反侵略的な内容・思想の方が重要視され、主に「政治小説」として受容されたのであろうと指摘した。『鉄世界』が東アジアで三回もの重訳が行われた背景には、近代初期の日中韓三国の科学への共通の関心を反映しているが、さらなる比較の結果、日本は文学革新、中国は科学啓蒙、韓国は政治闘争の価値に注目していたという三ヶ国の着眼点の相違が明らかになった。

第四部では、「日本語→中国語」の例として『佳人之奇遇』を取り上げ、中国における受容と韓国における不受容の様相について考察した。『佳人之奇遇』は、柴四朗の自伝的な作品で、1885年から1897年にかけて全16巻で刊行された。憂国の志士である主人公東海散士の政治活動を叙述した作品であり、日本の国権の守衛と拡張を主張するとともに、愛国主義の精神を宣揚し、帝国主義的傾向を内包した、明治日本で最も広く読まれた政治小説である。1898年、中国の戊戌変法に失敗した梁啓超は、日本亡命の際に『佳人之奇遇』を偶然に読み、政治小説が自国の民衆への政治啓蒙の有効な手段であるという啓発を受けてすぐ翻訳に着手すると、同年、中国語訳文を『清議報』に連載し始めた。梁啓超の中国語訳『佳人之奇遇』は、作品の愛国主義の精神を優先に強調すると同時に帝国主義的な側面を弱め、中国に不利な政治見解を改削するという批判的受容を行った結果、中国で多くの読者を得た。一方、1885年、韓国の甲申政変に失敗して日本に亡命した金玉均は、柴四朗に訪問され、『佳人之奇遇』（初編）を読んで跋文まで書いたが、政治小説を通して自国の民衆への政治啓蒙を推進することに考え至らなかった。明治政治小説のほかの代表作『経国美談』『雪中梅』が韓国語に翻訳・翻案されており、また中国語訳『佳

人奇遇』を連載した『清議報』が韓国の多くの知識人に愛読されていた事実からも、『佳人之奇遇』が韓国でよく知られていたことを推知できる。加えて、本論では『佳人之奇遇』が韓国に受容されなかった理由を解明するため、開化期韓国国内の政治状況の下、作中の主人公が日本人であり、「国賊」金玉均が肯定的に描写されており、帝国主義的な対韓策が露骨に主張されていることの敏感性を検討した。『佳人之奇遇』に対しては、中国では作品の愛国主義の側面が注目され、肯定的な認識が主流であった一方、韓国では作品の帝国主義の側面が注目され、否定的な認識が主流であったと言える。

第五部では、「日本語→韓国語」の例として『金色夜叉』を取り上げ、その韓国における受容と中国における不受容の様相について考察した。『金色夜叉』は、尾崎紅葉の代表作で、資本主義が急速に台頭する1890年代の日本社会を舞台に、金銭問題により別れた貫一とお宮の悲恋を描き、愛の重要性和金の虚無性を力説する家庭小説である。1897年から1902年まで『読売新聞』に連載され、1898年から巻を分けて出版され、『不如帰』と並ぶ明治のベストセラーとなった。1913年、『金色夜叉』は趙重桓により『長恨夢』という題目で韓国語に翻案され、韓国で多くの読者の涙を誘った。日本人の貫一とお宮の物語から韓国人の守一と順愛の物語へ翻案される際、愛と金の衝突や男女の三角関係はそのまま訳されている反面、ヒロインを貞潔固守の伝統的女性へ回帰させるなど、韓国読者が受け入れやすいような改作も加えられている。筆者の調査によると、近代中国においては『金色夜叉』に関連した記録が数件しか見当たらないことから、受容に至らず冷遇されたであろうことが窺える。『金色夜叉』が近代中国に受容されなかった理由を解明するため、『金色夜叉』と当時中国で流行していた「言情小説」を比較分析し、女性像・啓蒙性・金銭問題・暴力描写などの諸側面における両者の異質性を検討した。『金色夜叉』で描かれている近代的な恋愛物語は、日本ではそれほどの抵抗感なく受け入れられた一方、韓国では部分的に改作されながら受け入れられ、中国では完全に受け入れられなかったという受容の「段差」が見られると指摘した。

結論部分では、近代初期の日中韓三国における文学関係の緊密性と文学交渉の活発さを再び強調し、日本・中国・韓国がその中で果たしたそれぞれの役割を評価するとともに、本研究で見えてきた中国と韓国における明治小説受容の類似点と相違点をまとめ、今後の課題を提示した。

論文審査の結果の要旨

氏 名	寶 新光
論 文 題 目	日中韓近代初期文学の関連様相研究－明治小説の伝播と受容を中心に－
要 旨	
本論文は、日中韓三国の近代初期文学の関連様相を探るため、1895 年から 1919 年までの中国と韓国における日本明治期小説の伝播と受容について、東アジア比較文学研究の方法により総合的に考察するものである。まず日中韓作品の書誌情報を全面的に調査し、明治小説の全般的な伝播状況を概観する巨視的考察と同時に、代表的な四作品『不如帰』『鉄世界』『佳人之奇遇』『金色夜叉』のそれぞれの受容の様相について微視的考察を行ったものである。 第一部では、1895 年から 1919 年にかけて中国・韓国に受容された明治小説の日本語版、中国語版、韓国語版の書誌情報に関する調査と収集を行い、三国間における東アジア近代翻訳文学の初めての目録である「明治小説の中国語韓国語の翻訳・翻案作品目録(1895－1919)」を作成しそれに基づいて明治小説の全般的な伝播状況を検討した。その統計から、(一) 中国・韓国に伝播した明治小説作品は総数 405 点であったこと、(二) 347 点の明治小説が中国に受容され、370 点の中国語翻訳が出版されたこと、(三) 120 点の明治小説が韓国に受容され、136 点の韓国語翻訳・翻案が出版されたこと、(四) 405 点の明治小説のうち、原作が日本作品であるのは約 3 割、西洋原作で日本語に翻訳・翻案された作品は約 7 割を占めていること、(五) ジャンルとしては多い順に、歴史・伝記小説、探偵・裁判小説、科学・冒険小説、政治・外交小説、家庭・言情小説、戦争・軍事小説であること、(六) この時期の東アジア三国間における明治小説伝播の経路は、「中国語←日本語→韓国語」、「日本語→中国語→韓国語」、「日本語→中国語」、「日本語→韓国語」の四つに分類できること、(七) 明治小説受容作品数の変遷として、中国では 1898 年～1901 年の萌芽期、1902 年～1909 年の隆盛期、1910 年～1919 年の低迷期と推移し、韓国では 1895 年～1904 年の萌芽期、1905 年～1915 年の隆盛期、1916 年～1919 年の低迷期と推移したことを明らかにした。 第二部では、「中国語←日本語→韓国語」の例として『不如帰』を取り上げ、中韓両国における受容の様相について考察した。『不如帰』は、日清戦争前後の日本社会を背景に伝統的家族制度に翻弄された夫婦、武男と浪子の悲劇を描いた徳富蘆花の代表作であり、118 刷りを記録した明治期最大のベストセラーである。『不如帰』は、中韓両国でも大きく注目され、中国では 1908 年に林紘・魏易『不如帰』、韓国では 1912 年に趙重桓『不如歸』、鮮于日『杜鵑聲』、金宇鎮『榴花雨』の三作に翻訳された。近代初期の日中韓三国の読者が、武男と浪子の近代的で清純な夫婦愛に新鮮さと魅力を感じたのに加え、封建的な家族制度のしがらみに引き裂かれた二人の愛情の悲劇を深く理解・共鳴したため東アジア全域で広く受容されたと推察した。一方、変容の様相も看過できない。日中韓のテキストの比較を通して、作中の日清戦争観と儒教倫理観の扱われ方に相違が存在することも明らかにした。特に前者の場合、中国のテキストでは「国恥」とされる日清戦争を巡って真剣な反省が付け加えられているが、韓国のテキストでは「痛史」とされる日清戦争への直視を回避する描写がなされ、中国では作中の日清戦争の叙述と戦争小説的な側面をも重要視したが、韓国では作中における男女の愛情の叙述と家庭小説的な側面にのみ注目した点で受容が異なると指摘した。 第三部では、「日本語→中国語→韓国語」の例として『鉄世界』を取り上げ、日中韓の重訳に見られる受容の変遷様相について考察した。『鉄世界』は 1887 年、森田思軒がフランス作家ベルヌの原典を英語訳本から日本語に重訳した小説で、仏独戦争後にフランス人の医学士が建設した理想都市「長寿村」とドイツ人の化学士が建設した鋼鉄都市「鍊鉄村」の対立と衝突が描かれている。日本語に翻訳される際に、森田思軒により大幅な改変が加えられ、従来の小説の陳腐さへの批判とベルヌ小説の斬新さへの称賛を展開した。このことから、『鉄世界』は日本において主に	
主 査 記 載 氏 名 ・ 印	朴 鍾祐

「新しい小説」、「新小説」として受容されたのである。1903 年、包天笑は『鉄世界』を日本語訳本から中国語に重訳した。包天笑は、科学文明の啓蒙と輸入という明確な目的を持ち、「科学小説」という角書(副題)を新設し、科学用語の翻訳と科学知識の伝達を重要視した。そのため『鉄世界』は中国において主に「科学小説」として捉えられる。一方、1908 年に李海朝は、『鉄世界』を中国語訳本から韓国語に重訳した。韓国語訳『鉄世界』は、「科学小説」を標榜したものの、作中の科学知識の翻訳は積極的に行われていない。『鉄世界』は、亡国の危機感が募る日韓併合前夜の韓国において、作中の反侵略的な内容・思想の方が重要視され、主に「政治小説」として受容されたと指摘した。『鉄世界』が東アジアで三回もの重訳が行われた背景には、近代初期の日中韓三国の科学への共通の関心を反映しているが、さらなる比較の結果、日本は文学革新、中国は科学啓蒙、韓国は政治闘争の価値に注目していたという三ヶ国の着眼点の相違が明らかになった。

第四部では、「日本語→中国語」の例として『佳人之奇遇』を取り上げ、中国における受容と韓国における不受容の様相について考察した。『佳人之奇遇』は、柴四朗の自伝的な作品で、憂国の志士である主人公東海散士の政治活動を叙述した作品であり、日本の国権の守衛と拡張を主張するとともに、愛国主義の精神を宣揚し、帝国主義的傾向を内包した政治小説である。1898 年、戊戌変法に失敗した梁啓超は、政治小説が自国の民衆への政治啓蒙の有効な手段であるという啓発を受けてすぐ翻訳に着手し、中国語訳文を『清議報』に連載し始めた。梁啓超の中国語訳『佳人之奇遇』は、作品の愛国主義の精神を優先的に強調すると同時に帝国主義的な側面を弱め、中国に不利な政治見解を改削するという批判的受容を行った結果、中国で多くの読者を得た。一方、1885 年、韓国の甲申政変に失敗して日本に亡命した金玉均は、柴四朗の訪問により、『佳人之奇遇』(初編)を読んで跋文まで書いたが、政治小説を通して自国の民衆への政治啓蒙を推進するに至らなかった。『佳人之奇遇』が韓国に受容されなかった理由として、中国では作品の愛国主義の側面が注目され、肯定的な認識が主流であった一方、韓国では作品の帝国主義の側面が注目され、否定的な認識が主流であったからであると結論づけた。

第五部では、「日本語→韓国語」の例として『金色夜叉』を取り上げ、その韓国における受容と中国における不受容の様相について考察した。『金色夜叉』は尾崎紅葉の代表作で、資本主義が急速に台頭する 1890 年代の日本社会を舞台に、金銭問題により別れた貫一とお官の悲恋を描き、愛の重要性和金の虚無性を力説する家庭小説である。韓国では 1913 年、趙重桓により『長恨夢』という題目で翻案され、日本人の貫一とお官の物語から韓国人の守一と順愛の物語へ翻案される際、愛と金の衝突や男女の三角関係はそのまま訳された反面、ヒロインを貞潔固守の伝統的女性へ回帰させるなど、韓国読者が受け入れやすいような改作も加えられている。一方中国においては『金色夜叉』は受容されなかった。その解明のため当時中国で流行していた「言情小説」を比較分析し、女性像・啓蒙性・金銭問題・暴力描写などの諸側面で異質性を検討したが、受容の「段差」が見られたとの指摘に止まった。

本論文は、東アジアの政治的、社会的状況の中から、明治小説の個々がもつ問題意識がそれぞれの文学土壌にどのように投影されたかを検証するとともに、その結果から作品が持つ意義に再解釈を試みた。今後の東アジア近代文学に新たな研究のあり方を指し示したことで大きな学術的意義があると判断される。

以上の審査結果を鑑み、本審査委員会では、論文提出者・寶新光が博士(文学)の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	朴 鍾祐	副 査	准教授	梶尾 文武
副 査	教授	釜谷 武志	副 査	国際日本文化研究センター・教授	劉 建輝
副 査	教授	濱田 麻矢			